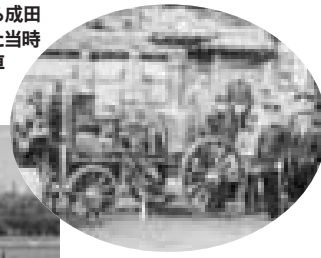


明治44年に新勝寺から成田町消防組に寄贈された当時最新式の蒸気ポンプ車



大正3年に購入され公津村で使用された腕用ポンプ

成田 歴史 玉手箱

50回

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。



安心・安全なまちづくりを目指し40年

「まだ消防庁舎が建設途中で市役所の宿直室が職場でした」と語るのは伊藤昌夫さん。昭和40年4月に市消防本部・消防署の発足をひかえ採用された職員18人の一人です。「6畳一間に署員が交代で寝泊りし、119番通報は市民課で取り次ぐことに。当時、無線もなく署員は市内の地理に不案内だったため、非番の日には市内全域の水利の確認、道路・建物状況などの把握に必死だった」と振り返ります。

また、同期の石原満さんは「採用が決まると県の消防学校に入校し、厳しい訓練と教育を受けました。海岸で行った夜間の号令訓練は、波の音で声が教官まで届かず何回も繰り返しました。発足間もない16月18日の国指定重要文化財であった新勝寺第一額堂の焼失と、市内全消防団が出動した昭和48年の野毛平の大火は、戦後の市内の火災史上に残る忘れることのできない火災です」と言います。

三里塚に新空港が決定後の昭和40～50年代、消防の装備は大きく変貌しました。人口の増加や高層住宅の建設、東関東自動車道の開通、空港開港などの都市化により、はしご消防車や化学消防車の順次配備・更新、分署の設置、特別救助隊の発足や消防救急一斉指令装置の導入など体制が大幅に強化されました。昭和55～60年には、特別救助隊

が全国消防技術大会に6年連続で出場(すべて入賞)し、成田市の消防技術の名声を高めることになりました。

市の消防のルーツは、明治27年の成田町消防組が改良ポンプ4台、160人の人員で編成されたことに始まります。その後、消防組は昭和14年の警防団、同22年の消防団と改組。現在、市消防団は7分団1,000人で構成されています。各々が職業をもちながらも災害が起きると昼夜関係なく集まる過酷な仕事です。伊藤・石原さんは「地元を熟知している消防団の役割、そして彼らを支える家族や関係機関の協力は絶大。一刻を争う災害現場では、日ごろ鍛えた組織力、技術・判断力が瞬時に試されます。そのような環境の中で皆相手の立場を思いやる“互譲の精神”を消防団員はもっています。そうでなければできない仕事です」と力強く語ってくれました。また、地域と密着しながら、消防車両27台・救急車6台・職員169人を擁するまでに成長した消防本部・消防署は今年40周年を迎えました。



今年の3月に配備された40m級の梯子を装備した新型車両

昭和48年ころ成田消防署で活躍していた消防車



編集後記

今の時期、農村部では毎日どこかしらで祇園祭が行われています。多くは白木の神輿を担いで集落内を練り歩くものですが、中でも勇壮なことで有名なのが4ページで紹介している「助崎の祇園祭」です。以前は神輿を放り投

げたり、塀や垣根を壊したりは当たり前だったとか。今回特に興味深かったのは祭りで使われる長刀と助崎城のお姫様の話。尾羽根川の語源が「お跳ね川」とは。記事を書きながらこちらにも勉強になることばかりです。